

ジョン・ロックの認識論における観念と性質の類似について

西村正秀

一 「類似」に関する素朴な解釈

『人間知性論』(一六九〇、以下、『知性論』と略記)第二巻第八章において、ロックは一次性質と二次性質の区別を提出している。⁽¹⁾この区別に関する最も難解な特徴付けは、感覚の単純観念とその観念が表象する性質との間に成立するとされる「類似 (resemblance)」である。⁽²⁾この章の第十五節において、ロックは次のように述べている。

ここから、次のことが容易に導かれると思う。すなわち、物体の一次性質の観念はその性質に類似しており、その範型は物体自体に実在的に存在しているが、我々の中に物体の二次性質によって産み出される観念は、その性質と全く類似していないということである。(二次性質の場合) 物体自体の中に、我々の観念と似ているものは何も存在しないのである。(HU, 2, 8, 15)

観念が性質と類似している、あるいは、類似していないという主張を「類似のテーゼ」と呼ぼう。問題は、ロックが「類似」によって何を意味していたのかということである。一般的に「類似」という語は非常に広い仕方で使用されるが、このテーゼの最も自然な解釈は「素朴」な解釈、すなわち、「一次性質の場合は、観念はそれが表象する性質と文字通り似ている、すなわち、観念は、物体のように、形や大きさを有しているのに対して、二次性質の場合は、観念

はそれが表象する性質と全く似ていない」という解釈であろう。⁽³⁾ 実際、「知性論」における様々な箇所でも、ロックは、観念が形や大きさなどの性質を文字通りの仕方でも所有しているという見解を示唆している。

可感的な大きさを持ったマナは、我々の中に円や四角形の観念を産出することができる。また、そのマナは、ある場所から別の場所へと移動させられることによって、運動の観念を産出することができる。この運動の観念は、運動を、それが動いているマナの中に実在的に存在しているように表象する。円や四角形は、観念の中であろうと存在の中であろうと、つまり、心の中であろうとマナの中であろうと同じである。そして、この運動も形も、我々がそれに気付く方が気付くまいが、マナの中に実在的に存在している。このことには、あらゆる人が即座に同意する。(HU, 2, 8, 18)

紙に描かれた図は、心の中の観念のコピーであり、言葉が意味表示において伴っている不確実性には陥りにくいであろう。線で引かれた角、円、四角形は、はっきりと視覚で捉えられるので、間違えられるはずがない。(HU, 4, 3, 19)

最初の引用においては、観念は、物体が形を持ち、運動しているのと同じように、形を持ち、運動を表象していると述べられている。このことは、ロックが類似を素朴な仕方で理解していることを強く示唆している。また、ロックが幾何学的推論を説明している二番目の引用では、紙に描かれた図は、「観念のコピー」として描写されている。この表現は、観念が、形や大きさといった性質を、紙に描かれた図と同じような仕方を持っているということを示唆している。

しかし、このような素朴な解釈には、幾つかの問題が存在している。その中でも、最も深刻な問題は形而上学の問題である。⁽⁴⁾ ロックによれば、観念は「知覚、思考、知性の直接的対象」として定義される心的存在者である (HU, 2, 8, 8)。一方、性質は、物体の中に存在し、心の中に観念を産出する「力 (power)」である (ibid)。観念と性質との間に、形而上学的身分に関する、このようなギャップが存在する場合、「類似」を素朴な仕方で解釈することは困難であるよう

に思われる。例えば、素朴な解釈によれば、丸いトマトの観念は、それ自体が丸い形をしているということになる。だが、物理的性質である延長を、心的存在者である観念が持つことはできないように思われる。事実、多くのロック研究者は、バークリーの「観念は観念以外のものに似ることはできない」という主張に倣い、類似に関する形而上学的問題を避けるために、反素朴的解釈を模索してきた。⁽⁵⁾しかし、私見によれば、反素朴的解釈は間違っている。本稿が目標とするのは、次の二点である。第一に、素朴な解釈が類似のテーゼに関する正しい解釈であることを、二つの代表的な反素朴的解釈を退けることによって示す。第二に、素朴な解釈を採用しても形而上学的問題を回避することができることを、ロックの認識論的方法を考察することによって示す。

二 類似のテーゼの再構成

まず、予備的考察として、一次性質と二次性質との区別において、類似のテーゼがどのような仕方で見られているのかを、簡単に再構成しておこう。前節における『知性論』第二巻第八章第十五節からの引用（「ここから、次のことが容易に導かれると思う……」）が示すように、類似のテーゼは、その章においてそれまで提示されてきた議論の「結論」として機能している。⁽⁶⁾実際、以下に見るように、このテーゼは、物体の一次性質が心の中に観念を産出する機構に関する因果的説明から帰結している。この説明は、当時、物体の性質に関する「理解できる (intelligible)」説明の中で最も進んでいるものとしてロックが受け容れていた、粒子仮説の一部である (HU, 4.3, 16)。

単純に言えば、粒子仮説とは、物体を微小な粒子の集合に還元し、物体が持つ性質をそれら粒子が有する幾何学的性質によって機械論的に説明する仮説である。この仮説によれば、物体の性質は、内在的性質と非内在的性質の二つに大別される。前者は、巨視的であれ微視的であれ、物体がそれ自体において持つ性質であり、「一次性質」と呼ばれる (HU, 2, 8, 9)。一次性質のリストには、延長、大きさ、形、運動と静止、固性 (solidity)、数、位置、構造が含まれる。

一方、非内在的性質は、物体の一次性質に基づいて、他の物体に様々な仕方で作作用する「力」に過ぎない。これらの非内在的性質には、心の中に、色や音や臭いや味などの可感的性質の観念を産出する力が含まれており、この力は「二次性質」と呼ばれる (HU, 2, 8, 7)。

観念の産出に関する説明は、粒子が持つ一次性質によってなされる。この説明の中核となるのは、粒子による「衝突」である (HU, 2, 8, 11)。まず、一次性質の観念が産出されるためには、「単独では知覚不可能な物体が、そこ〔対象〕から目の方に来て、それによって、脳にそれらの観念を産むような運動を伝えなければならない」 (HU, 2, 8, 12)。この脳内の運動から、人間には不可知の過程を経て、心の中に観念が産出される⁽⁸⁾。次に、物体が持つ二次性質の観念の産出も、「同じ仕方で」、すなわち、一次性質のみを有する粒子の感官に対する衝突によって、機械論的に説明される (HU, 2, 8, 13)。ここで、ポイントとなるのは、この説明は、色や音などの可感的性質を、物体の内在的性質として措定しないことである。ここから、ロックは、一次性質については観念と性質は類似しているが、二次性質の観念に類似しているものは物体の中には存在しないと結論付けるのである。

以上が、観念が産出される機構の因果的説明において、類似のテーゼがどのような仕方で見られているのかについての概略である。ここで、我々は、ロックが、この因果的説明から正確には何を結論付けているのかという点を見極めておかねばならない。特に留意すべきは、類似の概念自体は、粒子仮説とは全く独立した要素であるという点である。観念の産出に関する因果的説明から帰結しているのは、性質の区別に応じて、観念と性質との類似は非対称的に取り扱われるべきであるということに過ぎない。別の言い方をすれば、この説明自体は、類似の概念を何も説明していないのである。むしろ、類似の概念は、類似のテーゼが粒子仮説から導かれる際に前提されている。それゆえ、粒子仮説の内容を幾ら吟味しても、「類似」とは何かに関する洞察を得ることはできないのである。

三 二つの反素朴的解釈

それでは、類似のテーゼは、どのように理解されるべきなのであろうか。本稿が擁護したいのは、一次性質に関しては、観念は、性質と現象的に類似した特性を有しているという「素朴」な解釈である。実際、本稿第一節で見たように、素朴な解釈には幾つかのテクスト上の証拠が存在している。だが、それにもかかわらず、多くの解釈者は、類似のテーゼに関して反素朴的解釈を提出してきた。以下では、これらの反素朴的解釈が、ロック解釈として間違っていることを示すために、(1)因果的解釈と(2)志向的対象解釈という、二つの代表的な反素朴的解釈を吟味する。

(1)の吟味から始めよう。(1)は、類似の意味を、知覚の因果的説明において用いられる表現の種類の一性と見なすことによって、形而上学的問題を回避する解釈である。⁽⁹⁾粒子仮説を前提した場合、感官に対する粒子の衝突から脳内の運動に至る因果的過程の説明においては、形、大きさ、運動などの一次性質に関する表現が使われることになる。それゆえ、一次性質に関しては、知覚の因果的過程を説明する場合と、その過程の結果として生じる観念を記述する場合との両方において、同じ種類の表現が使用される。反対に、二次性質に関しては、因果的過程を説明する際に用いられる表現と、観念を記述するために用いられる表現とは異なる。例えば、「赤さ」の観念が心の中にどのように産出されるのかを説明するために、「赤さ」という表現は用いられない。そこで使用されるのは、粒子が持つ一次性質を記述する表現に限られる。(1)の提唱者は、類似はこのような表現の種類に関する同一性に存しており、それゆえ、類似のテーゼは「観念が延長している」といったような形而上学的主張にはコミットしないと考えるのである。

だが、残念ながら、前節で指摘した、類似の概念は粒子仮説から独立であるという事実を考慮すれば、(1)は空虚な解釈であることが分かる。例えば、「形の観念」を考えてみよう。たしかに、知覚の因果的説明において使用される唯一の表現は、一次性質を記述する表現である。しかし、ピーター・アレクサンダーが指摘するように、「形の観念」とい

う表現が正しい表現であるためには、「その観念は形を持たねばならないが、心的なものが形を持つということが有意味な仕方方で主張されうるのか否かが、まさに問題なのである」⁽¹⁰⁾。別の言い方をすれば、(1)は、一次性質が心の中に観念をどのようにして産出するのかに関する因果的説明を繰り返しているのに過ぎないのである。

次に、(2)の吟味に移ろう。この解釈の代表者はアレクサンダーである⁽¹¹⁾。アレクサンダーによれば、類似の概念は、ロックの観念の本性を説明することによって分節化されなければならない。彼の戦略は次のようなものである。まず、ロックの観念が知覚の志向的対象であること、すなわち、我々に現れている限りでの物体の性質であることを示す。その上で、類似は、これらの志向的対象と物体が実在的に有する性質との間に成立していることを主張するのである。

ロックの観念を持つ存在論的身分を特定することは、非常に困難である。観念は、心の中における知覚の直接的対象として定義されるが、ロック自身は、そのような直接的対象自体が持つ本性を特定していない。伝統的には、感覚の単純観念は、心像 (mental images)、すなわち、知覚において外的対象の代理として機能するような、知覚可能な特性を内在的に持つ心的存在者として理解されてきた⁽¹²⁾。だが、アレクサンダーによれば、観念は、そのような心像ではない。むしろ、観念は、「私によって知覚された事物」、すなわち、知覚の志向的対象として理解されるべきなのである⁽¹³⁾。

この主張を支持するために、アレクサンダーは二つの理由を提出している。第一に、「観念は心の中に存在している」という主張は、文字通りに受け取られてはならない。たしかに、観念は「心の中に」存在すると主張される。この主張は、観念が心の中に存在論的に位置しているということを含意しているように見える。しかし、そのように考える必要はない。アレクサンダーによれば、観念が「心の中に」あるということは、単に、観念が心一依存的であるということ、すなわち、「観念は、対象と心との相互作用から生じている」ということを意味しているのに過ぎない⁽¹⁴⁾。第二に、ロックの観念は「物理的空間における位置」を有している⁽¹⁵⁾。ロックは、スコラ的な概念を用いて、観念を「心象、思念、形象 (phantasm, notion, species) とよびて意味される全てのもの」として特徴付けている (HU, 1, 1, 8)。それらの中で、

「形象」は、しばしば、心の外にあるものを表す概念として使用されてきた。この事実から、アレクサンダーは、「被（ロック）が使用する「観念」は、心-依存性だけではなく……、ある意味での外部性（externality）の示唆を含むような、疑いを招きやすい語であるように意図されていた」と結論付ける。⁽¹⁶⁾

さらに、観念が持つこの外部性は、ロックが観念と性質との類似に関する一般の見解を記述する際に用いた「鏡」の類比によって裏付けられる。ロックは、次のように言う。

炎は熱くて明るく、雪は白くて冷たく、マナは白くて甘いと、炎や雪やマナが我々の中に産む観念から呼称される。普通は、これらの性質がそれら物体の中に存在しているのと、それらの観念が我々の中に存在しているのとは同じであり、観念は、鏡の中に存在するように、性質の完全な類似物であると考えられている。もし別様の考えを唱えれば、ほとんどの人に途方もないと判断されてしまうであろう。(HU, 2, 8, 16)

ある対象が鏡の前にある場合、その鏡は対象の像の中に含んでいる。この像は、その対象の形や大きさを持ちながら物理的空間の中に位置している、あるいは、位置しているように見えるのであり、もし対象が動けば、その像も動く。アレクサンダーは、このような鏡像が持つ特性を観念に適用する。例えば、ある形の観念が「心の中」に存在する場合、この観念は、鏡の中の像が持つと同じ仕方、形を有している。さらに、この観念は、鏡像が持つと同じ仕方、物理空間上の位置を有している。

観念の本性に関するこのような解釈は、一種の直接実在論を示唆する。⁽¹⁷⁾ たしかに、ロックの知覚論は本質的に表象説である。しかし、アレクサンダーは、たとえ実在と現象との間にギャップが存在するとしても、知覚の直接的対象が心の内在的特性であるということは帰結しないと主張する。⁽¹⁸⁾むしろ、知覚の直接的対象は、かくかくの特性を有しているように見える、空間における事物そのものなのであり、「観念」は、このような志向的对象を表す専門用語として用いられているのである。具体的に言えば、我々が丸いトマトの観念を持っている場合、「観念」が表しているのは、心の

内在的特性ではなく、丸く見える空間上のトマトそのものなのである。

もし、ロックの知覚論をこのような仕方方で解釈することができれば、知覚の直接的対象は外的対象そのものとなるので、類似に関する形而上学的問題は解決される。例えば、形の観念と対象が持つ形との類似は、そのような形を持つているように見える対象が、その形を実在的にも有しているという事態を意味していることになるのである。⁽¹⁹⁾

私は、観念がどのようにして延長しうるのかという問題を、観念の本性を考察することによって説明しようとしている点で、(2)は見込みがある解釈であると思う。しかし、残念なことに、(2)による観念の解明は間違っている。この間違いは、アレクサンダーが知覚の志向的对象と表象自体とを混同している点に存している。彼の戦略は、心的存在者が延長していると言うことを、観念を志向的对象と見なすことによって回避するというものであった。たしかに、もし、観念が志向的对象であるならば、それは外的対象から存在論的に区別される心的存在者ではなくなるので、延長していると言っても問題はなくなるであろう。だが、ロックの観念は志向的对象ではない。以下に見るように、ロックは、「観念」を心の内在的特性としての表象自体を指示するように用いている。

現代の心の哲学において、志向的对象と表象自体を区別しなければならぬということは、もはや常識である。⁽²⁰⁾ 例えば、猫の絵を考えてみよう。その場合、この絵の志向的对象は、屋根の上などの実在的な世界に存在する猫である。一方、絵の具や紙から作られている猫の絵は、実在的な猫を志向する表象自体に過ぎない。もし、ロックの観念が志向的对象ならば、アレクサンダーが主張するように、それは物理的空間に存在する。だが、次のロックの文言は、観念が別の場所に位置付けられていることを示唆している。

心が観想する事物は、心自体を除いて、何ものも知性に現前することはないので、何か別のものが考察されている事物の記号、あるいは、表象として、知性に現前する必要がある。そして、それが観念なのである。(HU, 4, 21, 4)

この引用では、ロックは、表象としての観念が存在論的に「知性に現前」しなければならぬと断言している。たしか

に、ロックは、しばしば、観念が外界に存在しているように語ることがある。例えば、観念と性質との区別を導入する際に、彼は、「私が〔観念を〕時々、事物自体の中にあるように語る場合には、それら〔観念〕を我々の中に産出する対象の性質を意味していると理解されたい」と警告している (HU, 2, 28)。しかし、これは、観念が本当に物理的空間に位置していることを意味しているわけではない。むしろ、この警告の含意は、たとえ空間の中に位置しているように見えても、存在論的には、観念は、対象の表象として心の中に位置しているということである。ロックの観念は、表象自体として整合的に解釈されるべきなのである。

以上の理由で、(2)は拒否されなければならない。たしかに、観念は知覚内容である。しかし、その存在論的身分は、心に内在的な特性としての表象自体である。それゆえ、ロックの観念は、アレクサンダーが言うような「私によって知覚された事物」とは同一視されえない。したがって、形而上学の問題を回避する彼の戦略は、失敗に終わるのである。

四 物質的像としての観念

前節の議論は、素朴な解釈の妥当性を示唆している。だが、素朴な解釈が受け容れられた場合、類似のテーゼを理解可能なものにするためには、ロックの観念が延長しうることが示されなければならない。本節では、そのことを示す試みの一つを、批判的に検討しておく。その試みとは、ロックの観念を物質的像として解釈する試みである。

まず、感覚の単純観念は、ある種の像として理解されるべきであることを簡単に論じておこう。前節で見た、観念は、対象の代理物として心に存在論的な仕方で見前しているというロックの主張は、観念がある種の像であることを示唆している。さらに、『知性論』には、ロックの観念が像であることを示す箇所が、他にも幾つか存在する。例えば、ロックは、実体の観念について、「時々、それらは、存在する事物において発見されうる諸性質の観念から構成される、心の中のそれら事物の写像 (pictures) や表象であるだけのように意図される」と述べている (HU, 2, 31, 6)。また、「二次

元の対象の観念から、奥行き観念がどのように形成されるのかを説明する際に、ロックは、「我々がそこ〔球〕から受け取る観念は、絵画の場合に明白なように、様々な色を持った平面に過ぎない」と主張している(HJ, 2, 9, 8)。さらに、記憶の観念を論じる際に、ロックは、それを、時々、意志によって呼び起こされる「眠れる写像」と呼んでいる(HJ, 2, 10, 7)。これらの箇所は、ロックが、感覚の単純観念を画像のようなものと見なしていたことを示唆している。だが、たとえ感覚の単純観念が像であるとしても、もし、その像が心像ならば、それはどのようにして延長することができるのであろうか。この問題に答えるためには、二つの方法がある。一つは、(a)観念が心的ではないことを示す方法であり、もう一つは、(b)物質的存在者のみが延長できるという考え方を否定する方法である。次節で論じるように、ロックは、後者の方法を用いたと考えられる。本節では、(a)はロックが採った立場ではないということを説明しておく。

(a)は、ロックの観念を物質的像と見なす方法である。例えば、マイケル・ジャコヴァイズは、ロックの観念が心像であった可能性を認めながら、それは物質的像でもありえたと主張する⁽²²⁾。このような主張は、「観念は心の中に存在する」というロックの主張から判断すれば、馬鹿げていると考えられるかもしれない。だが、ロックの認識論的態度を詳細に検討すれば、(a)はそれほど馬鹿げた解釈ではないということが理解される。ここで、鍵となるのは、心の本性に関するロックの不可知論である。前節で述べたように、ロックは観念の存在論的身分を特定しなかった。その理由は、彼の認識論的方法に求められる。「知性論」序論で、ロックは、自分の認識論的方法を次のように説明する。

私は、今は、心の物理的考察(physical consideration)には立ち入らない。すなわち、心の本質はどこに存するか、精気のどのような運動、あるいは、身体のどのような変化で、我々は感官による感覚を持つようになり、あるいは、知性における観念を持つようになるのか、また、この観念は、それが形成されるにあたって、何れか、あるいは、全てが物質に依存するのだろうかなど、そうしたことの検討には煩わされぬ。これらの思索が、どれほど

好奇心をそそるものであり、興味深いものであつても、今の私の意図から外れているので、私はそれを行わない。今の私の目的にとつては、人間の識別機能が、その取り扱うべき対象に携わる様子を考察すれば十分であろう。そして、もし、こうした記述誌的で平明な方法 (historical, plain method) で、我々の知性が、様々な事物について、我々の持つ思念を獲得するようになる道筋を何か解明でき、知識の確実性に関する何らかの尺度や、人々の間で見出されるはずの様々な信条の根拠を解明することができれば、私は、こうした場合に、私の考えていくことが全くの間違ひでもなかったと思うであろう。(HU, I, 1, 2)

「物理的考察」とは、心や物体の「構造、特性、作用」に関する思弁的探究であり、観念の本性の解明はこの探求に属する (HU, 4, 21, 2)。逆に、「記述誌的で平明な方法」とは、当時のイギリス王立協会において重視されていた、経験的な方法論である。この方法によれば、我々は、事物の本性を、我々の観察を超えてまで探求することはない。⁽²³⁾

記述誌的方法は、ロックの観念が物質的像でありえたことを含意する。ジャコヴァイズが指摘するように、その証拠は、ジョン・ノリスに対するロックの返答に見出される。⁽²⁴⁾ ノリスは、『知性論』に対する最初の批評家の一人であり、ロックが観念の本性を特定していないという不満を述べていた。⁽²⁵⁾ この批判に対して、ロックは、「記述誌的で平明な方法」に従う限りでは、観念の本性を「知覚の直接的対象」以上のものとして特定する必要はないと返答している (To Norris, p. 10)。さらに、ロックは、「観念が」実体であるのか、実体の変様であるのか、また、その実体は物質的であるのか、非物質的であるのか」といった考察を行わないとも断言している (To Norris, p. 11)。この返答は、ロックが、観念は物質的である可能性を否定していなかったということを示唆している。

さらに、『知性論』第四卷第三章第六節において示唆される心の唯物論の可能性も (a) を支持する。ロックによれば、人間は、認識能力の脆弱さゆえに実体の本性について知ることができず、それゆえ、思考する実体が非物質的であるのか否かを決定することができない。この論点を示すために、ロックは神の全能性に訴えて、人間は、全能である神が

「適当に配置された物質のある体系に、知覚したり思考したりする力をお与えにならなかったかどうか」を決定することはできないと主張する (HU, 4.3.6)。もし、心を唯物論的に説明する可能性が否定できないならば、心的な観念も物質的でありうることになる。

ロックの観念が物質的像であるならば、観念が延長していることに何の問題もなくなるので、形而上学の問題は解消される。だが、私は、ロックの観念を物質的像と見なすことは、次の二つの理由から難しいと考える。第一に、ロックは観念が物質的像である可能性を否定してはいないが、だからといって、観念が物質的であると肯定的に述べているわけでもない。第二に、より決定的な理由として、ロックが観念を物質的像とは区別されたものとして扱っているテクスト上の箇所が存在する。それは、『全てを神の中に見るといふマルブランシュ神父の意見の吟味』(一六九三、以下、『マルブランシュ』と略記)第十節に見出される。観念が産出される機構の機械論的説明は理解不可能であると言うマルブランシュに対して、ロックは、「像」と「印象」を同義に用いて、次のように述べる。

私の仮説が関わる分の質料因に対してマルブランシュ神父が提出する反論にもかかわらず、ここで私が述べたことは、物理的光線によって可視的形相がどのようにして目の中に運ばれるのかを理解できるものとするのに十分である。しかし、この仕方では網膜上に像が作られるとしても、我々がそれをどのように見るのかについては、それを見の中に見ると言われた場合と同様に、想念する (conceive) ことはできない。光線によって網膜上に作られた印象については、理解することができる。また、そこから脳へと至る運動も想念されうる。だが、その運動が我々の心の中に観念を産むことについては、確信はしているが、その仕方は私には理解不可能なのである。(EMO, p. 217)

この箇所では、観念は網膜上の物質的像ではなく、外的対象の表象であると明言されている。さらに、理解可能性に関する、生理的過程と心身関係との対比は、観念が物質的ではないことを強く示唆している。ここで、心の中の観念が脳内の運動によって産出される仕方を、ロックが「理解不可能」と表現している点に注意されたい。もし、観念が物質的

であるならば、心の中の観念が脳内の運動から産出される仕方と脳内の運動が網膜上の衝突から産出される仕方との間に内在的な違いはないはずなので、ロックは、観念が産出される仕方、「理解不可能」という表現ではなく、脳内の運動が産出される仕方に対して用いた「想念されうる」という表現で説明したはずである。

以上の理由から、ロックの観念は、むしろ、心像、あるいは、非物質的像として理解される方がよいであろう。実際、上述したように、多くのロック解釈者は、ロックの観念を形や色を何らかの仕方でも有した心的存在者として解釈してきた。私は、このような解釈は基本的には正しいと考えている。しかし、もしそうならば、ロックは、類似のテーゼの素朴な解釈が伴うと思われる形而上学の問題をどのように解決しえたのであろうか。

五 ロックの不可知論と形而上学の問題

ロック自身は、心像である観念がどのように延長しえたのかを明示的には論じていないが、私は、彼を形而上学の問題から擁護することができると考えている。本節では、ロックが、前節で言及された方法(b)、すなわち、物質的存在者のみが延長しうるということを否定する方法によって形而上学の問題を回避していたことを示す。

(b)には、二つのアプローチがある。一つは、非物質的像も延長しうるということを直接的に示すというアプローチである。⁽²⁶⁾ もう一つは、物質的像だけが延長しうるという見解は独断的であるので、受け容れられる必要がないということを示すアプローチである。ロックが採ったアプローチは後者である。ロックによれば、我々は、観念の本性に關して不可知論を採り、経験から得られる事柄だけを受け容れるべきなのである。

まず、ロックが形而上学の問題を認識していたという点を確認しておこう。その証拠は『マルブランシュ』第十八節に見出される。この節で、ロックは、観念をデカルト的な非物質的実体と見なすマルブランシュの見解を検討している。マルブランシュの観念を「実在的な精神的存在者、すなわち、実体」と定式化した後に、ロックは、その観念を次のよ

うに批判する。

ここでは、精神的な、つまり、非延長的な実体が、不等辺三角形や異なる大きさを持った二つの三角形などの延長した形を心に表象するということが、いかに理解し難いかを注意するに留めておこう。(EMO, p. 219)

この箇所は、もし、我々が、延長を属性として持たない、デカルト的な非物質的実体概念を受け容れて、それを観念と同一視すれば、観念と一次性質との間に形而上学的問題が生じること、ロックが認識していたことを示している。

では、ロックが形而上学的問題を認識していたのならば、どのようにして、彼はその問題を解決したのであろうか。その答えは、「ロックは、非物質的実体を非延長的存在者と見なすデカルト的な考え方を拒否し、非物質的である観念が延長しうることを認めた」というものである。⁽²⁷⁾ この答えは、我々の認識能力に関する、ロックの悲観主義的見解に根ざしている。ロックは、彼の著作を通じて、有限である人間が獲得しうる知識の範囲は非常に制限されていることを、繰り返し述べている。⁽²⁸⁾ 例えば、上述したように、我々は、心の本性を理解するために適切な能力を有していない。同じことは、心の特性である観念の本性についても当てはまる。たしかに、我々は、前節で、ロックの観念は心像として理解されるべきであると結論付けた。だが、たとえ、観念が心像であるという解釈がもっともらしいとしても、その心像がどのような特性を持っているのかをさらに特定することは、我々には不可能なのである。

もし、非物質的な観念の本性を特定することができなければ、観念は延長することができないと想定することは論点先取である。それゆえ、我々は、観念の本性について、不可知論的態度を採らなければならないというのが、ロックの結論である。ここで、我々の認識能力の限界は、非物質的な観念は延長できないということを含む点に注意されたい。前者は認識論上のトピックであるが、後者は形而上学上のトピックである。ロックは、これら二種類の問題を峻別していた。例えば、彼は、たとえ、我々が脳内の運動から観念が心の中に生み出される機構を理解できなくて

も、「事物の本性と内的構造を見たり知ったりしている別の精神」ならば、それを理解できると考えていた (HU, 4, 3, 9)。同様に、たとえ、我々が心像はどのように延長しうるのかを理解できなくても、別の精神や神がそれを理解しうるということは、形而上学的には全く可能な想定なのである。

ここまでは、形而上学の問題に対して、ロックが観念の本性に関する不可知論を用いて解答を与えたことを論じてきた。しかし、その場合、即座に一つの問題が生じる。観念の本性が不可知である以上、形而上学的には、観念は、最終的にデカルト的な非延長的実体と同一視されるかもしれない。もしそうならば、なぜ、ロックは観念が延長していると主張し続けることができるのであろうか。不可知論を唱えながら、観念の延長について主張し続ける何らかの正当な理由を、ロックは持っているのであろうか。

この問題に答えるためには、我々は、ロックの不可知論が「記述誌的で平明な方法」の帰結である点に留意しなければならぬ。この方法の要点の一つは、それは、形而上学的説明に対して、我々の経験に認識論的優位性を与えるということである。例えば、『マルブランシュ』第十八節で、観念の本性に関する幾つかの候補を枚挙した後、ロックは「それゆえ、いくら観念を実在的な精神的実体と想定しても、それが実体でも様相でもなければ、それが何であれ、私はその本性に関して、それは私が見出すような知覚であると告げられる以上に教えられることはない」と結論付けている (EMO, p. 220)⁽²⁹⁾。この結論は、観念の形而上学的説明に対して、経験によって獲得される「知覚」が認識論的優位性を有しているということを端的に示している。同じ教訓は、観念の延長についても当てはまるであろう。結局のところ、我々は、知覚の直接的対象が延長していることを観察せざるを得ない。たしかに、実際問題として、そのような対象の本性を知ること、我々には不可能である。だが、記述誌的方法が採用される限り、そのような対象が延長しているという事実を否定すべきではない⁽³⁰⁾。そして、そのような対象が「観念」と呼ばれるのである。このような認識論的方法から見れば、我々が採るべき態度は、観念が延長しているという事実を受け容れて、心像としての観念が持つ本性につ

ては、不可知論を貫くことなのである。

六 結 論

要約すれば、素朴な解釈が類似のテーゼに関する最も妥当な解釈であり、我々は、この解釈を、ロックの認識論的方法に訴えることによって、形而上学の問題から擁護することができる。ロックが言う感覚の単純観念は、心像として同定される。このことは、非物質的存在者が何らかの仕方では延長的性質を有していることを含意し、その含意は、形而上学の問題の標的とされてきた。この問題に対して、ロックは直接的解答を与えていない。だが、彼は、形而上学の問題は論点先取を行っているという診断を下すことによって、この問題を退けることができた。さらに、ロックは、彼が認識論において採用していた記述誌的方法によって、有限の人間は観念の本性を特定できないという主張と平行して、観念は延長しているという主張を維持し続けることができた。したがって、我々は、ロックの認識論において、類似のテーゼを素朴な仕方では主張することには何の問題もなかったと結論付けることができるのである。

注

- (1) 本稿では、以下の略記を用いる。HU: *An Essay concerning Human Understanding* (1690), ed. by P. H. Nidditch (Oxford, 1975), EMO: *An Examination of P. Malebranche's Opinion of Seeing All Things in God* (1693), in *The Works of John Locke*, 10 vols. (London, 1823), vol. 9, To Norris: *JL Answer to Mr. Norris's Reflection* 92 in R. Acworth, "Locke's First Reply to John Norris," in *Locke Newsletter* 2 (1971), pp. 8-11. 『知性論』からの引用は、巻、章、節で表す。なお、『知性論』の訳出に際しては、大槻春彦訳『人間知性論』全四冊(岩波文庫、一九七二—七)に教えられることが多かった。
- (2) 本稿では、特に断りがない限り、感覚の単純観念を、単に「観念」として言及する。
- (3) 素朴な解釈の擁護については、K. P. Winkler, "Ideas, Sentiments, and Qualities," in *Minds, Ideas, and Objects*, ed. by P. D.

- Cummins and G. Zoller, *North American Kant Society Studies in Philosophy*, vol. 2 (Ridgeview, 1992). → M. Jacovides, "Locke's Resemblance Thesis," in *Philosophical Review* 108 (1999). 26-47.
- (4) 形而上学の問題の他に、素朴な解釈は認識論の問題を有している。観念は知覚の直接的対象なので、外界に対して「知覚のモデル」として作用すると考えられる。その場合、我々は観念と性質との類似を原理的に知ることができなくなるので、類似のラベはその有意味性と正当化を失うように思われる。幸うなことに、この問題については P. Alexander, *Ideas, Qualities and Corpuscles* (Cambridge, 1985), pp. 195-7 が説得力のある解答を与えている。
- (5) G. Berkeley, *A Treatise concerning the Principles of Human Knowledge* (1710), in G. Berkeley, *Philosophical Works including the Works on Vision*, ed. by M. R. Ayers (Everyman, 1975), p. 92.
- (6) この点で P. Alexander, op. cit., p. 190 が負っている。
- (7) 二次性質に加えて、物体には「単なる力」と呼ばれる非内在的性質がある (HU, 2, 8, 23)。この性質は、他の物体が持つ一次性質を変化をもたらし、その中に異なる可感的性質を生じさせる。
- (8) ロックによれば、心身関係は人間には不可知である (HU, 4, 3, 28, EMO, p. 217)。
- (9) 因果の解釈の提唱者では J. Bennett, *Locke, Berkeley, Hume: Central Themes* (Oxford, 1971), pp. 106-7, E. M. Curley, "Locke, Boyle, and the Distinction between Primary and Secondary Qualities," in *Philosophical Review* 81 (1972), pp. 451-4 が著述している。
- (10) P. Alexander, op. cit., p. 198. M. Jacovides, op. cit., pp. 464-5. → 同様に批評を要している。
- (11) P. Alexander, op. cit., pp. 198-203 が同じ。同じような解釈では J. L. Mackie, *Problems from Locke* (Oxford, 1976), pp. 49-50 が著述している。
- (12) 伝統的解釈については R. I. Aaron, *John Locke*, 3rd ed. (Oxford, 1971), Part 2, Ch. 3, J. Bennett, op. cit., Ch. 1, M. Ayers, *Locke*, 2 vols. (Routledge, 1991), vol. 1, Part 1 を参照。
- (13) P. Alexander, op. cit., p. 202. 「強 (ロックス) が感覚の概念を観念として定義している様子は、われ (心像) を意味しているように思われる」(ibid., p. 95)。
- (14) P. Alexander, op. cit., p. 201.

- (15) P. Alexander, op. cit., p. 200.
- (16) P. Alexander, op. cit., p. 100.
- (17) 同様の指摘については、田村均「ジョン・ロックと微粒子説」、井上庄七・小林道夫編著『自然観の展開と形而上学—西洋古代より現代まで—』（紀伊國屋書店、一九八八）所収、二〇九頁を見よ。ここで、直接实在論は知覚表象説とは相容れないと考えられる向きがあるかもしれない。だが、必ずしもそのように考えなくてもよい。例えば、我々は「知覚の副詞説」を両者のアマールガムと考えることができる。ロックの観念説を直接实在論と見なす解釈については、J. W. Yolton, *Perceptual Acquaintance from Descartes to Reid* (Blackwell, 1984) を参照された。
- (18) フレックサンダーによれば、我々は、鏡像を指差すときに、鏡を指差しているのではない。むしろ、「我々は、鏡の「中」にあるが、私はこちらの言い方を好むが、鏡を「通じて」、像を指差すことができるのである」(P. Alexander, op. cit., p. 201)。
- (19) 「観念が性質に類似していると言いうことは、事物が、ある側面において、実在的にそうであるのと同じように我々に見えていふと言いうことである」(P. Alexander, op. cit., p. 201)。
- (20) 「*Of Sense and Sensation*」 G. Harman, "The Intrinsic Quality of Experience" (1990), in G. Harman, *Reasoning, Meaning, and Mind* (Oxford, 1999), pp. 246-52 を参照された。
- (21) 感覚の単純観念が像であるという主張は、観念が概念的要素を全く含んでいないということを意味するわけではない。逆に、富田恭彦『ロック哲学の隠された論理』（勁草書房、一九九一）、二一九三頁が指摘するように、ロックの観念の多くは概念的要素を含んでいると考えられる。
- (22) M. Jacobides, op. cit., pp. 470-80 を見よ。
- (23) ロックは王立協会のメンバーであった。ロックが記述誌的方法を好んだ理由は、科学における経験の役割を重視しない、スロウ的な独断論を避けるためであったと考えられる。
- (24) M. Jacobides, op. cit., pp. 473-4.
- (25) J. Norris, *Cursory Reflections upon a Book call'd, An Essay concerning Human Understanding* (1690), in J. Norris, *Christian Blessedness* (Garland, 1978), pp. 3-4.
- (26) ジャコヴァイスは、心像が非確定的な形や大きさを有しているということを興味深い仕方でも論じている (M. Jacobides, op. cit., p. 473)。

cit., pp. 478-80)。しかし、そのような非確定的な形や大きさが正味なところ何であるのかは、未だに不明である。

(27) 同様の指摘については、M. Jaccovides, op. cit., p. 475を参照されたい。ただし、シャコヴァイズは、心を「非物質的様相としての観念を伴った非物質的実体」と想定した場合には、観念が延長していると想像することが困難になり、ロックは、特別な場合を除いて、そのような想定を拒んでいたと主張している。だが、以下で述べるように、非物質的実体であるという想定だけからは、観念が非延長的であることは帰結しない。それゆえ、記述誌的方法に従う限り、観念は非物質的であるという想定を特に拒む必要は、ロックにはなかったと考えられる。

(28) 例えば、『知性論』第四卷第三章を参照されたい。

(29) 同様の発言としては、「観念が何であれ、心が知覚する以上のものであるはずがない」(HU, 2, 28, 5)がある。

(30) ロックは、経験から受け取られるデータを、バイアスの掛かった仮説によって歪めてはならないことを警告している (HU, 4, 3, 6)。

(筆者) にしむら・せいしゅう 京都大学大学院文学研究科COE研究員／哲学)

The third argument relies both on the Kripkean thesis that dispositional predicates are non-rigid designators and on a logical possibility that one and the same disposition might behave differently in a possible world where different natural laws obtain. While accepting the former (Kripkean thesis), I argue that we are not forced to accept the latter. We can explain the apparent contingency of natural laws by means of objects' contingent *possession* of dispositions.

In section 5, I propose an essentialistic theory of dispositions as an alternative to Prior's. The theory claims that there exist ungrounded (bare) dispositions. According to the theory, the ungrounded dispositions are identical with their causal bases, and are causally potent for that reason. It is also claimed that dispositions are intrinsic and actual properties of their bearers.

Locke on the Resemblance between Ideas and Qualities

by

Seishu NISHIMURA

COE Research Fellow

Kyoto University

In *An Essay concerning Human Understanding*, Locke argues that, in the case of primary qualities such as size, shape or motion, ideas resemble the qualities they represent, while in the case of secondary qualities such as color, taste or sound, ideas are not like the qualities they represent. The puzzle is what exactly Locke means by "resemblance." Lockean ideas are mental entities, whereas qualities are physical properties. Given this metaphysical gap between ideas and qualities, it seems too naive to say that ideas may or may not resemble qualities literally. For this reason, many Locke scholars have interpreted "resemblance" in an anti-naive way. My aim in this paper is twofold: first, to argue that the naive interpretation is indeed the right interpretation of "resemblance"; secondly, to explain how Locke's epistemological method allows him to maintain that ideas may literally resemble qualities.

We can vindicate the naive interpretation by dismissing the two leading anti-naive interpretations: causal interpretation and intentional-object interpretation. The former is an interpretation, which avoids the above metaphysical problem by identifying the resemblance with the sameness of the vocabularies used for denoting ideas and qualities in the causal account of perception, as far as the primary

qualities are concerned. Unfortunately, this interpretation begs the question because it presupposes the very point that an idea can have size, shape or motion as physical objects do. The latter interpretation is an attempt to dismiss the metaphysical problem by assimilating Lockean ideas with intentional objects, that is, the objects which appear to us. However, since Locke denies that ideas can be characterized as such objects, this interpretation must be rejected.

Furthermore, Locke can avoid the metaphysical problem, while maintaining that the naive interpretation is plausible. Judging from the textual evidence, Lockean ideas should be understood as *mental* images. Now, the question is how these mental images can have properties such as size, shape or motion. We can find the answer to this question in Locke's epistemological method. In the metaphysical problem it is assumed that no mental entities, including ideas, can be extended, unlike physical properties. This idea can be dismissed in Locke's epistemology. His main epistemological device is a "historical, plain method," a scientific method entirely based on our observations. This method implies that we must take an agnostic attitude towards the nature of mind because any inquiries into it go beyond our observations. This means that, in this method, the idea that no mental entities can be extended must be rejected as a dogmatic opinion. Thus, since Locke does not have to take the metaphysical problem seriously, there is no problem for him to maintain the resemblance between ideas and qualities in the naive way.

The Interpretation Problem of Quantum Mechanics and Scientific Realism

by

Yuichiro KITAJIMA

Part-time lecturer

International Buddhist University

Scientific realism holds that the physical world exists independently of human perception, and that the aim of science is to provide a true description of the world. Entities, properties of entities and structures consisting of relations between entities could be regarded as the elements of reality from a realistic point of view. The interpretation problem of quantum mechanics is an attempt to answer the question; which properties of physical entities are real in quantum mechanics? That is, this problem presupposes that properties of physical entities can be